

趣意文

司会 愛知県立大学 中根千絵

「医事説話」とは、美濃部重克によりたてられた研究領域であり、「医術、医家、治療、養生、病気に関わる側面での人間や事件などを主題にした説話を総称」するものである。美濃部は二〇〇四年、自身の論考において「その範囲と意味とは流動的であって研究の進展と進化によって、それらは面白い世界を開示することになると期待している」と述べている。先んじて、二〇〇二年には、本シンポジウムパネラーの一人である福田安典により宋代の医学書『医説』が紹介されており、中世の「医事説話」の研究は、それを参照する形で始まった。本シンポジウムにおいて、中世の「医事説話」を担当する辻本裕成は、美濃部、福田と共に、この「医事説話」の研究に携わってきた一人である。さて、それから一〇年以上たった現在、当時においては珍しかった医学と文学の合同プロジェクトがいくつか生まれている。そうしたプロジェクトの一つに関わってきたのが本シンポジウムにおいて、近世初期の明代版本『本草綱目』の享受を扱う入口敦志である。

近世においては、福田安典が『医学書のなかの「文学」』にも論じたように、文芸世界と医学は不可分の領域に存在し、「医事説話」は広く享受されていくこととなる。本シンポジウムは、南山大学教授・辻本裕成「医事説話の嚆矢」、国文学研究資料館准教授・入口敦志「医事説話の中興期」、日本女子大学教授・福田安典「医事説話の行方」の発表を通じて、中世と近世の医事説話の違い、「医事説話」の利用のされ方の違いを議論する機会としたい。その議論からは、海外からもたらされた医学書の享受の在り方、「医事説話」を利用する人々の文化圏、実学と教養と文学の狭間に揺曳する人々の認識が捉えられるかもしれない。また、「医事説話」というジャンルを超えて中世と近世という時代の違いの問題を提起することになるかもしれない。あるいは、科学史研究に回収されえない、抽象的な思考を目に見える形に物化する行為へとつき動かされる人の意識そのものに肉薄する試みとなるかもしれない。

最終的には、美濃部が提唱した「医事説話」の研究が果たして、どこまで進んだのか、それはどれくらい面白い世界を開示できているのか、また、今後、「医事説話」という研究領域が中世文学研究、あるいは、近世文学研究に新たな世界を拓くことができるのか、そうした大きな視野のもとに、「医事説話」について、広くフロアと共に議論したいと思っている。

「医事説話の嚆矢」

南山大学 辻本裕成

惟宗具俊編『医談抄』は、中国宋代の医学『医説』をはじめ、諸書から治療事例を採録して、本邦初の医事説話集としての性格を有した書物となった。『医談抄』は、直接には後進の医師に読ませるために編まれたと思われるが、発表では、何を後進に伝えるために本書が編まれ、なにゆえ説話を集成するという手段が選ばれたのかを考えたい。

『医談抄』の説話の主たる出典となった『医説』は、『万安方』にも幾度か引用されるが、『万安方』では、『医説』を純然たる医学として受容しており、時に引かれる治療事例についても説話として受容する側面は希薄であるように思われる。近い時代の『医説』受容のあり方と比較すると、『医談抄』は、『医説』を説話の源泉として受容することを選び取っていると語る。『万安方』と比較することを通じて、また本草書である『証類本草』への『医談抄』の向かい方と合わせて、説話として治療事例を集積することが、医師という職能集団の中に於いて、どのような営為であったのかを考えたい。

明の李時珍『本草綱目』は、万暦二十四年（一五九六）に刊行されるや、その約10年後、慶長十二年（一六〇七）には林羅山が入手し徳川家康に献上している。文禄慶長の役の混乱が治まらない時期に、早速に輸入されており、注目度が高かった。和刻本も寛永十四年（1637）版を皮切りに続々と出版され、後代に大きな影響を与えることになる。

『本草綱目』に関する注や和解など、直接の影響も大きい。しかし、説話という視点から見た場合には、その刺激によって新たに作り出されることになる日本独自の著作に見るべきものがあるだろう。例えば『訓蒙図彙』（中村惕斎、寛文六年（一六六六）刊）や『大和本草』（貝原益軒、宝永六年（一七〇九）刊）のようなものである。これらはある意味での和様化を推し進めたものと捉えることが出来るだろう。そのような和様化の中で、日本独自の事物が集められることになる。本草学にとどまらない、博物学的な発展ともいえるが、その中に説話的な言辞が集められ、更に後世に影響を与えるようになる。中興という所以である。

本報告では、『本草綱目』に直接的あるいは間接的に影響を受けながら、日本独自のものを志向する著作について考えてみたい。

「医事説話の行方」

日本女子大学 福田安典

美濃部重克氏の提唱による「医事説話」は、医学・本草学の内容のみならず医学史そのものが、「モノガタリ」的機能を胚胎することを包含し、多彩に展開していった。本シンポジウムでは、「龍宮仙方」というおよそ現実的ではない医学処方の伝説をまとって本邦で語られた医師・孫思邈説話を取り上げ、その諸相を見ていきたい。

孫思邈の名及びその著書は『日本国見在書目』に見え、夙に『医心方』『医談抄』『医家千字文註』などに採録されている。その意味では漢方医学が日本医学に影響を及ぼした純然とした医学現象ではある。ところが、この孫思邈の医学の基底には龍宮から授かった「仙方」があるという説話が彼邦にあり、それが本邦にも伝来する。ゆえに、孫思邈の著書『千金方』『千金翼方』は医家で重宝される一方で、文学にも新たな題材を提供することとなった。その代表例が、慶長九年豊国社臨時祭で上演された新작『孫思邈』である。能『孫思邈』については王冬蘭氏の詳細な研究があるが、それにとどまらず近世中期の都賀庭鐘までを視野に孫思邈説話の文芸化をたどってみたい。

医師という存在自体が説話化されていくことの意味をもって医事説話の行方を探ってみたい。